

2014年度 国際金融論 シラバス

担当 岩村 英之

2014年4月8日

1 講義の概要

経済学は、私たちの**経済的な幸福**について考察する学問です。経済学が注目する重要な経済変数に、景気と物価があります。景気が停滞し、企業業績が悪化すれば、失業して稼ぎを失う人が増え、また新卒者の多くが職を得られないかもしれません。物価が急激に上昇すれば、これまでの給料で購入できる製品の量は減少し、生活水準を落とさざるを得ません。一国全体の企業活動はどのような理由で減速するのでしょうか。また、(個別の製品ではなく)製品・サービス全般の価格水準はどのような要因によって急騰するのでしょうか。経済学(特にマクロ経済学)は、こうした私たちの日々の生活の豊かさに密接に関連する問題を考察する学問なのです。当然、経済学の一分野である「国際金融論」も、広い意味では私たちの経済的な豊かさの決定要因を考察することになります。

ただし、国際金融論は、国際間の経済取引を明示的に考慮する点に特徴があります。私たちは外国から製品・サービスを輸入し、同時に外国に製品・サービスを輸出しています。また、外国の企業にお金を貸し、同時に外国の投資家からお金を借りています。こうした国際間の貿易・金融取引の活発な状況では、外国で起こった変化は複雑な経路を通じて容易に自国に伝播します。また、自国で起こった変化が外国へ伝播し、さらに自国に跳ね返ってくるというようなことも起こり得ます。このような**外国経済との強い相互依存関係**を前提として、私たちの経済的な豊かさがどのように決まるのかを考察することが、特に国際金融論のテーマであると言えるでしょう。また、外国と自国の経済的豊かさがどのように関係しているのかも、国際金融論の重要なテーマです。

どのような問いを扱うのか

実際に経済的な豊かさを考察するためには、目に見える何らかの数値(経済学では「変数」と言う)を頼りにする必要があります。どういった数値によって、私たちの経済的豊かさをとらえることができるのでしょうか。あるいは、どういった数値が経済的豊かさに影響を与えるのでしょうか。GDP(国内総生産)や失業率、インフレ率といったよく知られている数値に加え、国際金融論では為替レートが重要な役割を担っています。したがって、国際金融論が扱う問いは、具体的には次のようになります。

- 為替レートはなぜ変動するのか – 短期・中期・長期の変動要因
- グローバル経済において、一国の経済的幸福を決定づけるマクロ経済変数 – GDP(雇用)、為替レート、金利、物価 – はどのように決まるのか
- グローバル経済において、外的なショック(自国・外国の政策変更、金融危機による人々の極端なリスク回避)が自国のマクロ経済変数にどのような影響を及ぼすのか(=私たちの経済的な幸福にどう影響するのか)
- 為替レート制度(変動相場制、固定相場制、共通通貨)の相違は各国経済のパフォーマンスにどう影響するのか(あるいは影響しないのか)
- 実際に各国はどのような為替レート制度を採用し、どのような経験を積んできたのか

どのように扱うのか –モデルを用いた分析

本講義では、これらの問いを**経済学的な観点から**考察していきます。経済学的に考察するとは、すなわち「モデル」を用いて考察するということです。

たとえば消費増税の効果を考察するとき、経済学者は最初に現実の経済を単純化して一種の「ミニチュア経済」をつくります。現実はあまりに複雑で、正面から立ち向かっても消費増税の効果を厳密に突き止めることは不可能です。そこで、ミニチュア経済において消費増税を「実験」することで、現実の経済における効果を考察する手掛かりとするのです。このミニチュア経済のことをモデルと呼びます。本講義で扱うような国際金融に関連する問いを考察するためには、外国と貿易・金融取引を行う経済を描写するモデルが必要です。そこで、そのようなモデルのひとつとして Krugman, Obstfeld and Melitz(2011) の提示するモデルを学び、これを用いて思考実験をすることで上記の問いに対する答えを導いていきます。試験や小課題においては、講義で学んだモデルを用いて、講義で扱うものとは微妙に異なる問いを考察し¹、一応の結論を導出することが要求されます。

ところで、モデルを動かすには、モデルの構造をある程度知らなければなりません。そして、モデルの構造を知る最短経路は、実際にモデルの構築作業をフォローして見ることです。そこで、本講義の前半は、KOMモデルを作り上げていくプロセスの解説に当てられます。

なお、本講義は「知る」講義ではなく、「理解する」講義です。断片的な事実・命題を提示してひたすら暗記力を問うものでもなく、公式を記憶させてひたすら応用問題を解かせるものでもありません。むしろ、その命題や公式がどのようにして導出されたのかを、最初の一步から端折らずに解説していきます。これは、皆さんが大学卒業後に求められることは、これまで経験しなかったような問題に対処するために**新たに公式を生み出す**ことだからです。誰かが考えた結果のみでなく、どう考えたのかを追いかけることで、本講義は経済学研究を志す以外の人にも間違いなく有意義なものとなるでしょう。経済以外のゼミに所属している人にこそ、是非最後までお付き合いください。

¹ 「モデルを動かす」と言う。

2 講義スケジュール

4/8	ガイダンス	
4/11	準備：経済学の工具箱	
4/15,18	外国為替市場：為替レートの決定	モデルの構築
4/22,25,29,5/2	資産市場：金利の決定，為替レートの短期的変動	
5/6	問題演習（1）	
5/9,13	経済活動の測定：国民所得統計	
5/16,20,23	財市場：GDP の決定	
5/27	問題演習（2）	
5/30	中間試験および前半のレビュー	
6/3,6	マクロ経済の均衡：為替レート，金利，GDP の同時決定	
6/10	マクロ経済の中期的変動，政策の効果	
6/13	問題演習（3）	
6/17	固定相場制のメカニズム	
6/20	固定相場制の実際	
6/24	ヨーロッパの通貨統合：最適通貨圏の理論	
6/27	為替レートの長期的変動：購買力平価説	
7/1	問題演習（4）	
7/4	ミクロ経済学の基礎	再びモデル
7/8,11	経常収支の決定理論：異時点間の最適化行動	
7/15	問題演習（5）	
7/18	最終試験および後半のレビュー	

- あくまでも予定です。受講者の興味・関心，理解度，あるいは私たちにコントロール不能な出来事によって変更する可能性があります。

3 前提とする知識（ミクロ/マクロ経済学・数学について）

原則として，経済学の基礎科目（ミクロ/マクロ経済学）についてはいっさい前提にしません。「これまで経済学の科目を履修したことがない」という人も，本気で講義に臨み復習に取り組むならば理解できるように設計しています。

国際金融論・国際マクロ経済学の大部分は，マクロ経済学を基礎として成立しています。しかし，国際学部では「マクロ経済学」という講義は提供されていないので，原則としてマクロ経済学の必要な部分は全て講義内で解説します。また，最後の「資本移動の動学理論」ではミクロ経済学の分析手法を用いますが，これについても講義内でカバーします。したがって，本講義を履修することで，国際金融・国際マクロ経済学を学びつつマクロ/ミクロ経済学の基礎を学ぶことができます。

数学についても，加減乗除を超える計算は用いませので，ほとんどの受講者にとっては障害とならないでしょう。

4 講義のウェブページ

私のウェブサイトはこの講義のページを作成しています。課題・試験等に関する情報は全てここにアップしていきます。配布資料がある場合も，必ずここにアップします。また，2009・2010・2011・2013年度の本講義の様子（試験問題を含む）も知ることができます。twitter (@hide.iwamura) やFBでの情報発信もしています。

<http://www1.meijigakuin.ac.jp/~iwamura/>

5 参考書

- [1] P. Krugman, M. Obstfeld, & J. Melitz, *International Economics: Theory and Policy, the 9th edition*, Addison Wesley, 2011.

世界でもっともよく用いられている国際経済学のテキストです。ほぼ2-3年に1回のペースで改訂されています。前半部分が国際貿易論、後半部分が国際金融論・国際マクロ経済学を扱っています。講義はほぼこの本の後半の内容に沿って進めていきます。講義では、本書で提示されている、為替レートを含めた国際経済の動きを記述する枠組である「DD-AAモデル」を、その構築から適用まで説明します。最近、10th editionが前半・後半分冊で出たようです。

- [2] P. クルーグマン, M. オブズフェルド (山本章子・訳) 『クルーグマンの国際経済学 下 金融論』ピアソン桐原, 2010年.

[1] のひとつ前の版 (第8版) の後半部分 (国際金融・国際マクロ) の翻訳です。

- [3] 岩田規久男 『国際金融入門 新版』(岩波新書 1196) 岩波書店, 2009年.

現日銀副総裁による一般向け入門書です。新書なので、経済学自体の初心者にもわかるよう丁寧に書かれています。制度・理論・歴史のいずれにもページが割かれていて、新書としてはたいへん贅沢な内容です。この分野を初めて学ぶ人が、短期間で全体像を掴むのに適しています。制度の部分がやや細かいので、金融論初心者とはぼして読んでもよいかもしれません。同じ著者の『金融入門 新版』(岩波新書) のほうを先に読むという手もあります。

- [4] 岩本武和 『国際経済学 国際金融編』ミネルヴァ書房, 2012年.

- [5] 高木信二 『入門 国際金融』(第4版) 東洋経済新報社, 2011年.

- [6] 深尾光洋 『国際金融論講義』日本経済新聞社, 2010年.

- [7] 藤原秀夫, 小川英治, 地主敏樹 『国際金融』(有斐閣アルマシリーズ) 有斐閣, 2001年.

[4][5][6][7] は、ミクロ・マクロ経済学と経済数学をある程度勉強した人を対象としたテキストです。私の講義に物足りなさを感じた場合、是非目を通してみてください。KOMに較べて多くのモデルが紹介されていますが、各モデルの説明はかなり簡潔になっています。[4] は各章の補足でその章で用いられている数学について丁寧に説明されており、文系だが数学に興味があるという人にちょうどよい噛みごたえではないかと思えます。

- [8] N. グレゴリー・マンキュー (足立他・訳), 『マンキューマクロ経済学 第3版I 入門篇』, 『マンキューマクロ経済学 第3版II 応用篇』, 東洋経済新報社, 2012年.

国際金融論の大部分は、マクロ経済学を外国との貿易・金融取引が存在するケースに拡張したものです。したがって、マクロ経済学の勉強はそのまま国際金融論へとつながります (実際、本講義の半分くらいはマクロ経済学の解説になります)。本書は、そのマクロ経済学の世界標準のテキストです。“経済学部”3,4年生向けですが、記述が丁寧なのでじっくり取り組めば6-7割は理解できるでしょう。ちなみに、本書は原著第7版の訳ですが、原著 *Macroeconomics* は第8版が出ています。

これ以外に、個別のトピックに関連する参考書・論文を随時紹介していきます。

6 成績評価

- 中間試験（30%）と期末試験（70%）の結果から総合点を計算し、受講者の得点分布を加味して最終成績を決めます。不定期に実施する小課題および小テストの点数は、エクストラとして総合点に加算します。
- 中間試験（5月30日実施予定）および最終試験（7月18日実施予定）については、学則によって代替措置が求められる場合（法定伝染病による出席停止など）のみ再試験を実施します。
- ただし、中間試験を受験しない場合でも、最終試験を受験する資格は維持されます。
- 出席だけを総合点に加算することはありません。ただし、経済理論の科目ですので、毎回の講義がそれまでの講義を基礎として成立することは心得ておいてください。毎回簡単な復習はしますが、ウェブサイトや友人・知人から情報を得て、欠席した（あるいは出席していたが意識を失っていた）回の内容はある程度把握しておいてください。
- 明学生の中で平均的な知力の人**が普通に予習・復習すれば**、十分に理解できるような講義になっています。逆に言えば、「自分は平均より下かもしれない」と意識した経験のある人は、積極的にオフィスアワーを利用したり、経済学の得意な友人・知人に教を乞うなどして、人一倍工夫をしてください。私は喜んで力をお貸しします。

7 オフィスアワー（Welcome!）

時間 毎週火曜日 12:25-13:20

場所 個人オフィス（8号館4階8413）

予約 基本的に予約不要。

これ以外の日時を希望する場合は、メールで連絡をください。 iwamura@k.meijigakuin.ac.jp
国際金融以外の経済学全般に関する質問・相談等も大歓迎です！